

測 定 する 能 力	
論理的言語力	論理的読解力A
論理的読解力B	論理的思考力
論理的読解力A	論理的表現力

日本語を論理的に扱う能力。一文の構造を論理的につかまえたり、「ことばのつながり」、指示語・接続語などを論理的に扱う力。

文章構造を論理的に解説する力。文と文との論理的関係、段落と段落との論理的関係、文章全体の論理構造を把握する力。

文章の要点を論理的に整理し、まとめる力。論理的に説明する力。おもに記述力・論述力。

他者に向かって、論理的に話す力。論理的に思考し、自分の考えを論理的に書く力。

《問題Ⅰ》 論理的言語力 (40点)

●解答

第一問

(1) 行数	10 ⑪ 行目	正	誤
(2) 行数	5 行目	正	誤
(3) 行数	9 行目	正	誤
(4) 行数	16 行目	正	誤
(5) 行数	9 行目	正	誤

よって切り方が異なるということ。
第四段落は「虹の場合」から。ここから動物の鳴き声の話ではなく、虹の連続する光の色を言葉で表す必要があるということ。最終段落は、「そこで、英語を」からで、国によって切り取り方が異なり、日本では親子代々七色と決まっています、いつの間にか私たちはそれが客観的な事実だと思いつつようになっていくこと。

国によって切り取り方が異なり、日本では親子代々七色と決まっています、いつの間にか私たちはそれが客観的な事実だと思いつつようになっていくこと。

《問題Ⅱ》 論理的読解力A (40点)

●解答

第一問 代助の眼は

第二問 (1) オ (2) イ (3) ア

第三問 イ ↓ エ ↓ ア ↓ オ ↓ ウ

第四問 (B) エ (C) オ (D) ア

(E) イ (F) ウ

第五問

地位や名誉を第一に考える兄には、すべてを捨てても愛に生きることなど理解できないと思っただけから。

第六問

親からのお金がたれた今、三千代との生活のために何よりもお金を稼がなくてはいけなくなったから。

■配点 第一問 6点 第二問 各1点

第三問 6点 第四問 各2点

第五問 6点 第六問 6点

◆解説

漱石の「それから」という小説の一場面です。最低限の情報の問題文の前に与えられているので、これをしっかりと頭に置くこと。時代は明治末で、現在の価値観とは異なる点がある。この時代は姦通罪が制定されていて、不倫は罪とされていた。

第一問

欠落文「それが二尺余あまりになっても」の指示語「それが」に着目。「二尺余」になったのは何かと考えると、「手紙は細かい字で書いてあった。一行二行と読むうちに、読み終った分が、代助の手先から長く垂れた。」とあることから、「手紙」であると分かります。平岡から代助の父親にずいぶん長い手紙が届いたのです。

第二問

(1) 直前に「複雑な経過を」とあります。代助はそれを一言で簡単に返答できないので、黙っていたのです。

(2) 比喩です。「重い」から、「鉄」。
(3) 言葉自体が古めかしいので、難しくかつたかもしれません。そういった場合は、文脈から推測するか、消去法で選択肢を絞り込みます。「了見」とは、考えのこと。
(4) 代助は「複雑な経過」をずっと返答していなかったことから、「依然」。
(5) 兄のセリフで、こんな不始末を仕出かすならば、今まで代助のために多くの金を使った「甲斐」がないということ。「甲斐」とは、それだけの値打ちのこと。
(6) 比喩。このときの代助の答える様子を見たときのもの。直後に「ただ遠い所を見る眼をして」から、「夢」。

第三問

兄の言い分を論理の順番に組み立てます。「分らない男」が話題ですが、アイエが代助のことで、ウオが一般論。そこで、どちらが先に来るかを考えると、(A)の直後の「それ」は一般論を指しているのので、アイエのグループが先に来ます。

アイエの順番ですが、冒頭に来るのは、話題を最初に提示したイ。それをエ逆接「それでも」で受けています。さらに逆接のAで、「おれも諦らめてしまった」。ここまでが代助のことで、次にそれを一般化しています。ウとオの順番は、ウがオの理由になっていることから、オ ↓ ウ。

第四問

B 直後の「また」に着目。エ「弁解があるなら」と、直後の「根拠のある事実なら」が並列関係。

C 直前の「生涯代助には逢わない」から、オ。

D 兄が大声で言ったセリフなので、ア。

E 直前の「陰で親の名誉に関わる様な悪戯をしている」につながるのは、イ。

F 兄の最後の捨てセリフだから、ウ。

第五問

代助は兄の質問に対して、ほとんど返答していません。兄が地位や名誉を重んじるのに対して、代助は「彼は彼の頭のうちに、彼自身に正当な道を歩んだという自信があった。彼はそれで満足であった。その満足を理解してくれるものは三千代だけであった。」とあるように、地位や名誉よりも純粋な愛を選んだのです。そうした代助の考えは、父や兄には到底理解できないものでした。①兄は「地位」「名誉」を重んじる、②代助は愛を重んじる、③代助の考えは兄には理解してもらえない、の三点がポイント。

第六問

代助は、本家からもう金で今まで裕福な暮らしをしていたが、今後は、親から勘当され、一切の援助をもらうことが出来なくなつたため、三千代との生活のためには金が必要になった。―線部の「ちよつと職業を探して来る」から、それが判断できる。

測 定

す る

能 力

論理的言語力

論理的読解力A

論理的読解力B

論理的思考力

論理的表現力

文章を論理的に読む力。一文の構造を論理的につかまえたり、趣旨を的確に把握する力。小説などを客観的に読む力。

文章構造を論理的に解説する力。文と文との論理的関係、段落と段落との論理的関係、文章全体の論理構造を把握する力。

文章の要点を論理的に整理し、まとめる力。論理的に説明する力。おもに記述力・論述力。

他者に向かって、論理的に話す力。論理的に思考し、自分の考えを論理的に書く力。

第一問

私は人間のく連続している。

連続していると考ええる。

別解「私は」を削除

あのように

このように

太陽光線が

太陽光線を

したがって

しかも

あたり水滴が、

あたり、水滴が

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

誤

正

第二問

段落分けは論理展開から。

第一段落は日本で虹は七色だということ。第二段落は「アメリカ人や」からで、英語を使う人々は虹が六色だと言う人が多ということ。

「ところで、動物」から話題を展開しています。そこで、ここから第三段落だと分かります。動物の鳴き声は連続しているという話で、それを言語で表すときは、言語

《問題Ⅲ》 論理的思考力

(40点)

●解答

- 第一問 (1) 他者に・ので
(2) 意味の・必要である

第二問

- (1) 平安時代の物語の作者は女房である。
(2) 忘れることにおいて個人差はない。

第三問

- (1) 絶体絶命の危機だ。
(2) 彼は理路整然と話す。

第四問

- (1) 君のスケッチ帳に描かれたものは山の生命を捉えていない、単なる線と面の集まりに過ぎないこと。
(2) 実際に生きている一羽の大鷲以上に、山が生命感溢れるように感じたから。

- 配点 第一問 各4点 第二問 各4点
第三問 各4点 第四問 各8点

◆解説

第一問

- (1) 「高学歴だが自分で考えて判断できない指示待ち人間が増えている。」が一文。
(2) 「漢字をただ書けるかだけではなく言葉としてとらえなければならぬ。」が一文。

第二問

助詞・助動詞を自立語につけて、まず文節を作ります。次に、その文節を並べかえて、一文を作成します。

- (1) 「作者は」「平安時代の」「女房で」「ある」「物語の」が文節。「作者は」↓「ある」が主語と述語で「平安時代の」↓「物語の」↓「作者は」、「女房で」↓「ある」とつながります。

- (2) 「忘れることにおいて」「個人」「差は」「ない」と、文節を作ることができれば、自ずと答えは見えてきます。

第三問

四字熟語を、漢字の組み合わせから連想できたかどうか。

- (1) 「絶体絶命」「危機」が分かったか。
(2) 「理路整然」が分かったか。

第四問

- (1) 「それはいわば自然の影絵」なので、「それ」の指示内容をつかまえたなら、直前の「自分が満足だと思ったところ」。「具体的」という条件から、今「君」がスケッチ帳に写そうとした山の姿だと分かる。なぜそれが「影絵」なのかというと、山は「寛大と希望とを象徴するようないつの子きた塊的」であるのに対し、スケッチ帳の画は「なんの表情も持たない線と面との集まり」にすぎなかったから。

- (2) ——線部②の「この生物」とは、一羽の大鷲、それがなぜ死物のように思われるかという、直前に「山が物言わんばかりに生きていると見える」とあることから、山の生命感と比べれば、生きている大鷲でさえ死物に見えるから。

《問題Ⅳ》 論理的読解力B

(40点)

●解答

- 第一問 D ↓ A ↓ C ↓ B
第二問 (僕の「話」)

第三問

小説の価値を決めるものは何かという問題。

第四問

- デッサンよりも色彩に生命を託した画
第五問 (1) ケ (2) イ (3) キ
(4) オ

- 第六問 イ・オ
第七問 (a) ウ (b) オ (c) ア
(d) エ (e) イ

- 配点 第一問 6点 第二問 4点
第三問 4点 第四問 4点
第五問 各2点 第六問 各2点
第七問 各2点

◆解説

第一問

各段落の冒頭を検討すると、Aには「しかし」、Bにも接続語が最初に来るので、CかDから始まると分かります。ただし、Cに「僕は三度繰り返し返せば」とある限り、Cから始まることはありません。そこで、Aから検討していきます。

Aの冒頭の「しかし」に着目すると、Dが小説の大抵は「話」を持っていること、Aの冒頭が、「小説の価値を定めるものは決して「話」の長短ではない」と、逆接でつながるので、D↓Aという順番になります。ここで、筆者は「話」のない小説が最上とは思っていないが、こういう小説も存在し得ると述べています。

さて、次にBかCかですが、Bの冒頭の「こういう小説」は、Cの末尾「こういう画に近い小説」を指しているので、C↓Bとなります。

第二問

欠落文の「それ」の指示内容を、Dから探し出します。もちろん、「それ」は小説以外のものを指しているので、「デッサンのない画は成り立たない」の直後に入ることが分かります。デッサンのない画が成り立たないように、「話」のない小説も成り立たないということ。

第三問

「文中の語句を用いて」という条件があるときは、該当箇所を抜き出し、変形します。冒頭の「小説の価値を定めるもの」が何なのか、傍線①は、そういった問題を指しています。

第四問

指示語の問題です。どのような画かという、前にある「デッサンよりも色彩に生命を託した画」を指しています。

第五問

- 選択肢が多い分だけ、難問と言えます。
(1) 評価とは関係がないという意味だから、ケ「埒外」。
(2) ここは謙遜しているので、イ「寡聞(見聞が狭いこと)」。

(3) 「話」の上に立っている詩なので、キ「叙事」。

- (4) セザンヌが「画」の破壊者であり、ルナールが「小説」の破壊者であるから、オ「小説」。

第六問

「話」らしい話のない小説」の例として、筆者はイ「ルナールの小説」を挙げています。またそれを段落Cで、「通俗的興味のないという点から見れば、最も純粋な小説」と述べているので、オが答え。

第七問

接続語と副詞の問題。

- a 話題の転換「では」。
b 「話」らしい話がない小説を、(b)の直前で「詩に近い」とし、それと同時に、直後で「小説に近い」と述べているので、添加の「しかも」。

c 直後の「話」のある小説にも勿論尊敬を表する」の理由が、空所直前なので、因果(順接)の「従って」。

d 「もしくすれば」と、仮定。

e 直前の「僕等の家にいる猫にもやはり愛着を感じる」に対して、直後でそれをひっくり返しているから、逆接の「しかし」。

《問題Ⅴ》 論理的表現力

(40点)

●解答例

私たちは教科書で習った歴史的事実を真実だと信じ込まされているが、それが必ずしも真実であるとは限らない。

なぜなら、歴史とは過去のことであり、誰も実際見聞したこともなければ、一人の人間が全体を俯瞰することも不可能だからだ。

もう一つの理由は、歴史学者が依拠する史料のほとんどが、時の政権が篡奪した権力を正当化するために作成させたものであるからだ。

いつの時代も時の権力者によって歴史は塗り替えられるものである。だから、教科書で習った歴史的事実は必ずしも歴史的真実であるとは限らない。

◆解説

自分の考えを自由に述べるのではなく、選択肢の語句の論理的関係を考え、それに基づいて論理的な文章を書けるかどうか、論理力を試す問題です。

「話題」は「歴史の虚偽性」で、「参考文献」がヒントになっています。

①「教科書」に書かれたものは、「参考文献」から、「歴史的真実」だとは限らないことが分かります。また学者は史料に基づいて歴史を書くのですが、その「史料」は「権力」を「正当化」するものである可能性がある、さらに、人間が歴史全体を「俯瞰」することなど不可能だと分かります。

五つの条件を満たしているかどうか、大切にす。

あとは、原稿用紙の表記に従って、正確な日本語が書けるかどうかです。